
凶気の迷宮

カゲヒナタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

凶気の迷宮

【Nコード】

N9142S

【作者名】

カゲヒナタ

【あらすじ】

「探索者」とはダンジョンに潜って、宝物を持ち帰り金銭を得る。主人公もそんな「探索者」の一人として活躍していた。やがてダンジョンでの戦闘に敗れ死んでしまう。しかし、気がつくところにはダンジョンであった。死んだはずの自分がなぜ？しかも、になつてるし！かつていた仲間はいない、自分の置かれた状況に混乱しながらも主人公は探索を再開する…主人公は、はたして物語は無事着地できるのか！？

階層その1「改訂1」

目覚めたときに感じたことは、懐かしさだった。

黴臭い、ジメツとした空気。

唯一の光源である、等間隔で壁に付いた松明。

そして、いつどこからモンスターが現れるかわからない緊張感。

どれもこれもが、私が「探索者」として生きていたときに感じたものだった。

だが、と私は思う。

（私は、死んだはずだ）

そう、私は志半ばで力尽き、死んだのだ。

記憶は遡り、脳裏には仲間の声が再生される。

「ゼクスッ！」

それは悲鳴だった。声の主はグンダードである。

すでにゼクスと呼ばれた重装備男の胸には“ダークデーモン”の凶爪が深々と突き刺さっていた。

「ッ…ガァ」

致命傷をおいながらも、ゼクスは大剣を振り下ろす。

“ダークデーモン”の腕が切り落とされ、串刺しのままゼクスも倒れる。

ヴッッモーーーーー

壁を揺らすほどの豪吼をあげながら、さらなる生贄を求め双眸は禍々しい赤光を放つ。

「みんな、撤退よ！」

私が叫ぶ。

状況は圧倒的に不利であった。

全員が疲弊していた。

すでに探索を終え、あとは帰還ゲートに向かうだけ…

そこに油断があった。

結果トラップに引っかかり、この階層にいるはずのない上級モンスターを呼んでしまった。

そして、今、前衛のゼクスを失った。

次の犠牲者は同じく前衛の魔法剣士ノエインである。

断末魔がダンジョンに反響し、私たちを戦慄させた。

残るは、盗賊ケイト、黒魔術師グンダード、神官アインス、そして私…

「撤退は無理ネ。ごめん、アタシがドジったから」

ケイトが申し訳なさそうにあやまる。

「気にするな、我々は全員覚悟を持って『探索屋』をやってるんだ」

『探索屋』、グンダードの口癖だ。

前衛を突破した“ダークデイモン”が目前に迫ってくる。

「光と闇の狭間より我は呼ぶ…」

グンダードの詠唱が始まる。

「足止めぐらいは、やってみる」

ケイトが飛び出す。

「みなさんに精霊の加護を」

アインスが付加魔法を。

そして、私は、…

そこで記憶は途切れてしまう。思い出そうと自分のことを考えた
が、自分が何者だったのかすら、思い出せないでいた。
周りを見ても仲間の死体もなければ、血溜りもない。

(私だけが、生き残ったの?)

怪我がないか確認をしようと、体を見る、

「！」

私は、自分が何か、わかった。

“ルー・ガルー”

私は、モンスターになっていた。

階層その1「改訂1」(後書き)

拙い文章ですが、お付き合いいただければ幸いです。

階層その2「改訂1」

鼓膜が悲鳴を上げなくなるような甲高い音を量産しながら、私は目の前のコヴォルトにとどめの一撃を加えたところだった。

(これで何回目戦闘だろう?)

そんなことをぼんやり考えながら、私は戦利品の回収をする。

数枚の金貨とポーションを拾い終わると私はマツピングを再開した。マツピングは探索の基本であり染み付いた習慣は、モンスターになってもなくならないものらしい。

モンスターの格好なら襲われたいだろうと思っていたがそんなに甘くはなく、いったいどんな識別方法があるのか、連中と遭遇すると必ず戦闘になった。

(ふー、これで終わったかな)

フロアの大まかなマツピングがようやく終わり、改めて確認する。(やっぱり以前とは形が変わってる。でも下りる階段しかないし、てことは地下一階)

ならばと、地上への出口があるんじゃないかと探したが、上がり階段はみつからず無駄な体力を消費したにすぎなかった。

(下に行くしかないか)

下層へ向かうため、下り階段まで来るとカシャッ、カシャッと、音が下から響いてくる。

(なに、この音? 階段を上ってる)

私は急いで階段から死角になる位置まで移動した。

なにが来るのか、私は息を殺して待つ。

「いや、しんどいわ」

音の主が現れると同時にそんな言葉が聞こえてきた。

その姿は、骨だ。

モンスター名はスケルトン・ナイト。

骨が長剣と盾を持った姿は戦士そのもの。

だが、骨だ。

(でも、しゃべれるなら私と同じ境遇なのでは)
死角から出て声をかける。

「え」と、は、はじめまして」

なるべく自然に声をかけたつもりだ。

「……………」

10秒ほど、沈黙。

「こりゃ、たまげた！　しゃべれるのか？」

しゃべりながらスケルトン・ナイトがこちらに近づいてくる。

「ええ、そっちもモンスターなのにしゃべってる」

「カツカツカツ、ということはアンタも“元”探索者か」

「私もびっくり、自分しかいないと思ってたから」

私はスケルトン・ナイトをビバーク地点へと案内した。

正直、すごくうれしかった。

孤独というのはつらい。

こんな姿になって状況もわからず、モンスターに怯えながら殺されるまで誰にも会うことなく、見つけてもらえることもなく、死んでいく。

そんな希望のない探索であった。

しかし、ここに同じ境遇の者が現れた。

骨だけ…

それだって、いないよりは百億倍はマシだ。

ビバーク地点に着くなり、スケルトン・ナイトは聞いてもいないのに自己紹介をはじめた。

「自分は東部出身の侍マスターだった、が志半ばで死亡。気がつけばこの姿で地下15階にいた」

「15階！　そこから一人で上がってきたの！」

これにも驚いた、15階といえば中堅メンバーでもパーティーを組まなければ攻略は難しい階層だ。この骨はそこを一人で戦い抜いたという。

「そんなに驚くことか？ 生きてた頃はソロで30階はいつてたぞ
生きてた頃のレベルはいくつだ？

ツッコむ気にもならず、話題をかえることにした。

「ここに来るまでに他にしゃべるやつはいなかった？」

「いや、アンタがはじめでだ。でアンタ名前は？」

オレはシンカイだ、とスケルトン・ナイトが言う。

「私の名前は……」

そこで言葉が詰まった。

思い出せないのだ、記憶はあいかわらず、霞がかりあいまいだっ
た。

だから、私が名乗った名前は

「ウルド」

とつさにでてきた名前は死んだ仲間のもだった。

ウルドは私が探索者になりたての頃に組んだ仲間の一人だ。

職業は“カランダカ武道家”

異常に好戦的なやつで後先考えず敵陣に突っ込んで、切られ、

殴られ、焼かれるという禱り屋泣かせな女だった。

ちなみに禱り屋とは回復役の職業“ブリスト僧侶”のことを指す愛称だ。

あるとき、なぜ無鉄砲に突っ込むのか聞くと、彼女は言った。

「アンタは仲間が傷ついて平気なの？アタシはいやだ、アタシは馬
鹿だから戦うことしかできないし、だったら敵を一体でも多く一秒
でも早く倒して戦闘を終わらせたい。それが一番だと思ってる」

だから突っ込むのだと。

そんなことを考えていたのかと、自分との意識の違いにショック
受け、戦い方を変えたきっかけでもある。

「でもそれでウルドが死んじゃったら意味ないじゃん」

私が聞くと、彼女は笑顔で言った。

「意味ないかな？アタシが死んでも仲間の誰かが生き残り探索を続
けていける。それってすごい意味あることなんじゃない」

そして、ウルドは言った通り、私たちを助けるため犠牲となった。

あ那时的笑顔が印象に残っていたからだろう、彼女の名前は思い出すことができた。

「ごめん、じつは生きてた頃の記憶があいまいなの。ウルドってのは仲間の名前」

「そうか、ならウルドでいいではないか。で、ウルドはこれからどうする？ 地上にはでれないのだろう」

シンカイは再び下層を目指すという。

「シンカイさえよければ私も一緒にいかせて」

悩む必要などなかった。

ではパーティー結成だなど、シンカイはカツ、カツ、カツと乾いた声で笑う。

パーティー、なんとも懐かしく、うれしい響きだろう。

私に仲間ができたのだ。

骨だけ…。

階層その3

「それ、脇がおろそかだ」

と同時にシンカイの模擬刀が私のわき腹を打つ。

「ウツ」

手加減をしてくれているとはいえ、やはり痛みはある。

「オレの勝ち」

勝利宣言すると、シンカイは再び間合いを取り直す。

「何度やっても勝てる気がしない」

私がふて腐れた声で文句をいうと

「本気で勝ちたいなら、工夫と鍛錬を欠かさないとだ」

骨のくせにもっともなことをいう。

フツと短く息を吐くと、私は剣を構えシンカイと向き合った。

現在位置は地下18階、休憩を利用して剣闘の訓練をしているところだ。

パーティーを組んでまもなくシンカイから私の戦い方に駄目だしがでた。

シンカイいわく「ド素人」とのこと。

生前の名前や職業が思い出せず、モンスターとして生き返ったときに装備していた剣をそのまま使ってきたのだが、どうやら使い方が出鱈目らしい。

どうすればいいか聞くと

「実戦が一番だ」というので、それから模擬刀を使った訓練が始まった。

訓練と休憩が終わり探索を再開しようとしたとき、シンカイがい

「次は19階だ。20階に下りる部屋には“守護者”がいる。そろそろ、禱り屋か壊し屋がほしいところだな」

禱り屋とは僧侶や神官などの回復・補助に特化した職業、壊し屋は黒魔術師や召喚師など破壊に特化した職業の愛称だ。

ここまで私たちのように言葉を話すモンスターと出会うことはなかった。

「19階にいることを期待するわ」

そんなに簡単に見つかるとは思っていないが、“守護者”が相手となると私だけでは不安なのだろう。

(正直ここまで来れたのだからシンカイの強さのおかげだ)

戦闘時はシンカイが切り込み役を、その戦闘力に怯んだ敵を私が追い撃つ、という形が自然とできていた。戦闘力の差を痛感した私は、足を引つ張らないようシンカイに訓練を申し出たのだった。

戦力不足という不安要素を無くしておきたいのは当然の判断と言える。

「さあ、下りるぞ」

下りる階段の前までくると、シンカイが振り向き声をかけてきた。

返事のかわりにコクンとうなずくと、階下へ視線を向ける。

階段には松明が設置されていないため、10段も下がればその先は闇であった。

私たちはゆつくりと踏みしめるように、一段、一段を下りていく。そして、私たちは闇に溶け込んだ。

“守護者”とはフロアを徘徊しているモンスターとは別格扱いで、桁違いに強力なモンスターが配置されていることが常である。10階、20階、30階、40階、そして最下層50階へ向かうためには、その上の階には“守護者”が配置され探索者の行く手を阻む仕組みになっている。当然“守護者”を倒せなければ階下へはいけない。

10階へ下りるときは、

「あ、もうオレが倒したから」といわれ、私は言葉がでなかった。10階とはいえ“守護者”を一人で倒してしまうシンカイの実力に寒気を覚えたのも記憶に新しい。

さすがのシンカイも20階は厳しいと判断したのだろう。だからこそ戦力の増強を期待したのだ。

しかし、期待もむなしく喋るモンスターと会うことなく、私たちは20階へ下りるフロアの手前まで来た。

「さて、ここまでできたからには覚悟をきめるしかあるまい」

シンカイはどうするか私に判断をまかせるという。

「いくにきまつてるでしょ。もう後戻りなんてできない、私たちは進むしかないのよ」

言つと私はフロアへの扉を開ける。

足を踏み入れた瞬間、

「我が眠りを妨げしは、何者ぞ？　ワレは闇の眷属を統べる者“ヴァンパイアロード”」

しゃべった！

「私は“ルー・ガルー”、こっちは“スケルトン・ナイト”よ！」

“守護者”がしゃべったことなど探索者時代から一度だって聞いたことがない。

「おい、大丈夫か？　もしかしたら我々の知らないうちに話すようになったのかもしれんぞ」

シンカイの冷静な声で、一瞬血の気が引く。そうだ。ここは私の知らないダンジョンなのだ。しゃべる“守護者”がいても不思議ではない。

そして、“ヴァンパイアロード”は、言った。

「しゃべっ……た」

“ヴァンパイアロード”は、青青した右目と濃赤色の左目を大きく見開きながら、しゃべった。そこには先ほどまでの高慢な響きはない。

「アンタたちしゃべれるのね！ あたしもよ！ 気がついたらこんな格好で、しかもここから出られないし、もう誰もこないって思っただけ、それで、モンスターがきたから、どうせわかんないんだろうけど、からかってやるうって、でも、でも不安で、寂しくて、寂しくて、不安で、もうどうしたらいいのかわかんなくて…」

彼女は一気にまくし立てると、今度は泣きはじめてしまった。

「あの、大丈夫？」

私が言うと、“ヴァンパイアロード”は涙と鼻水でくしゃくしゃになった顔を向ける。ありえない光景だが、今の私たちも十分ありえない存在だ。

「ぐす、アタシは、ヴィクトリア、転送に失敗して死んだの。でも気づいたらこんなところに一人、ゴメン、さっきもいったよね」

少しは落ち着いたのかヴィクトリアはゆっくりと立ち上がると

「では、改めてアタシは“ヴァンパイアロード”のヴィクトリア、探索者の頃は『安楽死』っていう渾名で少しは有名だったのよ」

と赤目を瞑ってみせる。そんな不吉な渾名をおちやめにいわれてもリアクションに困るといふものだ。私は心あたりがなかったので、シンカイは知ってる？ と振ってみる。

「オレはシンカイだ、アンタがああいう壊し屋で有名な『安楽死』さんか。面識はないが、噂ではすぐに核撃を放つ危ない奴だと聞いている」

「ひどいなあ、この姿になってからはまだ撃ってないよあ」

危険な話をする二人と温度差を感じつつも

「私はウルド」

と私も短く自己紹介をする。

「ちょうど、壊し屋か禱り屋がほしいと思ってたところだったんだ」

仲間にならないかとシンカイがさっそく勧誘をする。

「もちろんよ！ アタシー人じゃここからでることもできないし」
こうして私たちに新たな仲間ができた。

心強い（？）仲間がまた一人増えたのだ。

さあ、いこう！

シンカイが先を促し、私とヴィクトリアが後に続く。

狼女、骸骨、吸血鬼、次は？

なんてことを考えると私はクスクスと笑ってしまう。

だってこんな姿になったって、希望がもてるんだから。

階層その4

「扉の向こうに気配があるわ」

氷結魔法でもかけられたかのような冷たい石扉から耳を離すと、私は二人にモンスターがいることを伝える。

「なら、この先は戦闘ね」

ヴィクトリアは色違いの目を爛々と輝かせる。

「よし、ウルド、開けてくれ」

シンカイが促す。

私はゆっくりと門をはずし、扉を勢いよく押し開く。

開いた瞬間、シンカイが飛び込み“あくまのすがた”をした敵二体の首を刎ねる。残った二体に私が剣で、ヴィクトリアが炎撃で攻撃する。

相手は“イン・キュバス”、中級モンスターだ。

私の長剣が“イン・キュバス”の片腕を切り落とす。凶声をあげながら血走った目が私を射抜く。

(そんなので怯むわけないでしょ)

柄に力を込めなおすと、返す刃で“イン・キュバス”の胸をなぎ払う。

横を見ると同じタイミングでヴィクトリアがもう一体を炭に変えていた。

弓やアーマーなどの戦利品をかき集めると、私たちはビバークポイントを探す。

「うまくいったわね」

「シンカイの奇襲が効果大ね」

と私たちは話ながら通路を進む。

話ながらというのが重要で、もし探索者がしゃべらない私たちを見たら間違いなく、100人中100人が襲ってくるだろう。

見た目は、狼女に骸骨剣士にヴァンパイである。
襲った人を責めることはできないだろう。

そこで私たちはなるべく会話をしながら歩くことに決めたのだ。
そうすれば、同じような境遇の人が 声を掛けやすくなるだろうと
せっかくの仲間が隠れてしまつては、意味がない。

「このあたりでいいんじゃない」

と夜目の利くヴィクトリアがちょうど良い広さのポイントを見つけてくれた。

「うむ、ではさっそく特訓だ」

やっぱりね…

休んでいる暇も惜しいのだろう、シンカイの稽古は階層毎に激しさを増していた。稽古の度に、少ない戦力を少しでも底上げしたい、とシンカイはいう。

私たちは今いる階層は、地下28階。つまり次の階には“守護者”が待ち受けている。

シンカイの焦燥は当然といえた。

「次もヴィクトリアのように元探索者なら楽なんだが…」

それは私たちも期待している。

ヴァンパイ・ロードのような強力なモンスターを相手に無傷で戦えるわけがないのだ。その戦闘を回避できたことは、奇跡といえた。
「いずれにしても私たちは引き返せないし、このさきへ行くしかないんだから」

自分に言い聞かせるように私はいった。

二人は「その通りだ」「アタシはこんなことになった理由が知りたい」と言葉は違うが引く気はさらさらなようだ。

再び、探索を開始した私たちは、なぜこんなことになったのか話ながら歩を進めていた。

「アタシが考えているのは、最下層に答えがあるってこと」

「いったことあるの!？」

私がつねると、

「まさか、想像よ、そ・う・ぞ・う」最高深は39階、とヴィクトリア。

「なんだ…」がっかりした私にシンカイが言う。

「いや、まんざらでもないぞ。オレは一度最下層にいったことがある」

あれ、いつてなかったけ？ とシンカイはとぼけている。

私とヴィクトリアは顔を見合わせてしまった。

「な、アンタ、“生還者”だったの!」

“生還者”それは最下層より戻った者の総称。誰が言い始めたのか、いつのまにか定着していた呼び名である。

「ああ、パーティの半分は灰になっちまったがな」とにかく驚いた。

“生還者”とパーティを組むということはそれだけでステータスだ。

彼らと組むには莫大な金貨を必要とする。おかげで偽“生還者”詐欺が横行しているくらいだ。もっともダンジョンに入ればすぐに化けの皮が剥がされるんだけど。

「話を戻すが、最下層で見た部屋はそれまでの階層とは作りがまったく違っていた。胴違つか言葉で伝えるのは難しいが、壁や床が石ではなかったんだ」

石造りじゃないことが何を意味しているのか、私には想像もできないが、ヴィクトリアはいつになく真剣な様子だ。

「ツルツルしてた？ ざらざらしてた？」

ヴィクトリアは矢継ぎ早に質問をしていた。

「どちらかといえばツルツルしてたな、刀や剣で床をつくったって感じが」

うんうんと思いついた節があるのかヴィクトリアはしきりにうなずいていた。

「これはますます最下層があやしいわ」

赤と青の瞳が怪しく光っていた。

地下29階へと下りてきた私たちはマッピングを開始する。

“守護者”の部屋は最後にしてフロアをくまなく調べることが優先した。もし仲間にあえれば戦力を強化する機会があるということだ。上級モンスターが相手とわかっている以上、戦力強化は期待したい。

「結局、いなかったわね」

ヴィクトリアが疲れた声でいう。

「愚痴ってもしかたあるまい」

シンカイがなだめるようにいう。

「まっ、いくしかないでしょ」

私たちはマッピングを完成させて、“守護者”の間の前に来ている。

結果から言えば、仲間はいなかった。あとはここに期待するしかないのだが。

「いい、いくわよ？」

私は重たい扉をシンカイと二人で押し開く。

声はきこえない。

かわりに肌を突き刺すような冷気が襲ってきた。

奥に相手がみえる。

それがゆっくりと大きくなる。

座っていたのだろう、立ち上がった姿は私の三倍の身長はありそ
うだ。

頭には二本の角があり、見覚えのある赤眼が禍々しく光る。

そう、私はこいつを知っている。

“アークデイモン”

期待は見事に裏切られた……………最悪の結果で。

階層その5

「おい、しっかりしろウルド！」

シンカイの叱咤が耳を打つ。

そうだ、こいつはあの時ヤツじゃない。

違う、チガウ、ちがう、T I、G A、U、言い聞かせるが、無理だった。

体は石化したように固まり、死ぬときの記憶が激流のように頭で再生されていく。

…前衛を突破した“ダークデモン”が目前に迫ってくる。

「光と闇の狭間より我は呼ぶ…」

グンダードの詠唱が始まる。

「足止めぐらいは、やってみる」

ケイトが飛び出す。

「みなさんに精霊の加護を」

アインスが付加魔法を。

そして、私は、…

…

…

…

逃げたのだ。

仲間を残して、置き去りにして、背中をむけて逃げたのだ。

そして、もう一体の“ダークデモン”が出現し、私は体を引き裂かれ、殺された。

思い出したくなかった、記憶だった。

ドンツと激しい衝撃を受けた私は、現実へと意識を戻す。

「ツカヤロウ！ 死にたいのか！」

シンカイの怒鳴り声で耳が痛い。

「ゴメン、ありがとう」

「お前、泣いてるのか？」

言われてはじめて気がついた。

ゴシゴシと腕でぬぐいながら、今は感傷に浸ってる場合じゃない。

「もう大丈夫、早くあいつをやっつけよ」

「そろそろいいかしら？ こっちの障壁も限界」

うん、ヴィクトリアもありがとう。

二人が守ってくれていた。

「シンカイ、隙は私を作るから、あとお願い」

「おい、死ぬ気か？ それにお前の力じゃとても…」

シンカイの言葉を遮り、私はいった。

「平気、全部思い出したから」

私は荷物入れから、弓を取り出すと

「私、弓兵だったの」といって弓に矢を番え、

「あの眼が気に入らないわ」

次の瞬間、

トン、トン、と小気味良い音とともに“ダークデモン”の両眼に矢が生える。

ヤツは低い唸り声とともに顔を覆う。

眼を射抜きながら、すでに私は“ダークデモン”につっこんでいた。

大振りの攻撃が襲う。それを屈んでかわすと巨体の脇を抜け、壁へと突進する。

ぶつかる瞬間、壁を登る。

登る。

登る。

登る。

そのまま天井も走り、“ダークデイモン”の頭上から矢を射る。今度は巨体の両肩に矢が生える。

私は天井を走り抜けると、そのまま壁を駆け下り、脚を狙った。

右腿に5本の矢が深々と突き刺さる。

そして、“ダークデイモン”は右脚から体勢を崩す。

「シンカイ！ 今よ！」

骸骨の姿を探すと、巨体から首を胴体から切り離なす瞬間であった。

それは両眼から矢を生やしたまま、放物線を描き床へと落ちる。

勝った。

動かなくなった巨体から刀やロッドなどの戦利品をかき集めていくと、

「驚きだ、弓兵があんな戦いをするなんて」

シンカイは私から刀を受け取りながら感心したように言う。

「結構練習したのよ」

「アンタって、もしかして『狂った弓兵』！？」

「私は全然気に入ってない渾名だけだね」

「『狂った弓兵』…思い出した、確か壁や天井を駆け抜けて敵を倒すという、本当にいたなんてな」

ウルドの一言、

「意味ないかな？アタシが死んでも仲間の誰かが生き残り探索を続けていける。それってすごい意味あることなんじゃない」

あの一言で私は戦い方を変えた。弓は捨てられない、そこで思い描いたのが前衛のように敵に突っ込む弓兵の姿だった。

思考錯誤していくうちに壁や天井を利用することを思いつき、アサシンに弟子入りしたのも今では懐かしい記憶だ。

「ならば、本当の名も思い出したのだろうか？」シンカイが尋ねてくる。

たしかに思い出していた、でも、と私は思う。

「うん、でもこのままウルドでいこうと思う。結局、今の私がいるのは彼女のおかげだし、その思いを忘れないようにと思うから」

シンカイもそれ以上は突っ込むことなく、

「そうか、では先へいこうか」と私たちを促す。

まだシヨックを受けているヴィクトリアとともに、シンカイの後を追う。

いよいよ30階、次の“守護者”までにはなんとしても仲間を増やしたいところだ。

階層その6

「あとは、ここのロックを解除すれば……」

私が宝箱のトラップを解除していると、シンカイとヴィクトリアの話し声が耳に入ってきた。

「つまり、アタシが見た場所もそんな感じだったわけ」

ヴィクトリアが熱く語っているのは最下層についての見解らしいが、私にはチンプンカンプンな言葉ばかりで理解は程遠い内容だった。

「戦闘後すぐに強制転送させられたからなあ、よくは覚えてないぞ」
シンカイが申し訳なさそうに言う。

「いいのよ、造りが違うってだけでアタシの仮説には十分だわ」

一人で納得しているヴィクトリアに、

「私にももつとわかりやすく教えてよ」と宝箱の中身を袋に詰め終わった私は、話に加わることにした。

「じゃあ、ウルドは地上を旅したことある？」

私が首を左右に振ると、

「アタシは北の果てまでいったわ、魔法を極めようと思って。そこで“イセキ”を見つけたの」

その“イセキ”が最下層に似てるっていうわけ？

「そう、地下迷宮とは違って昼間のように明るかったわ。おかげで探索に苦労はしなかった、モンスターもいなかったしね。で、そこにあつた知識を読み漁ったらいろいろとわかったの。明るくしてるのも“デンキ”というものらしくて、今は存在しない魔法だとアタシは考えてる。もう感激して時間が経つのを忘れたわ」

ちなみにその“イセキ”は古代に“シエルター”と呼ばれた非難所らしいの。

ヴィクトリアは一息つき、続ける。

「シンカイが見たここの最下層の造りが、アタシが見つけた“イセ

キ”に似てるって言ったでしょ？　つまりこの地下迷宮も古代に作られたんじゃないかってこと。当時の魔法には死者の魂を保存することが出来るものもあったらしいの。そして新しい体にその魂を移してたって書いてあったわ」

これって今のアタシ達の状況に似てない？　とヴィクトリアは言う。

「なら、私たちがモンスターなのは、人間の体がなかったってこと？」

そのへんはわからないけど、答えは最下層にあるわ！　と力説する。

「二人とも、おしゃべりはそこまでだ」

ピシヤリとシンカイが言う。

理由はいうまでもない、戦闘だ。

眼前にはデスサイズを担いだ2体の“フラッカー”と氷でできた“フロストゴーレム”1体がいた。

シンカイは“フラッカー”1体の首を飛ばすと、2体目へと攻撃を移した。

突進してくる“フロストゴーレム”にはヴィクトリアが炎撃を放っていた。

私が5本の矢を残った“フラッカー”に打ち込むと同時に、シンカイがとどめを刺す。

“フロストゴーレム”は3発の炎撃を食らうと蒸発して消えた。

戦闘が終わり、戦利品を集める。

「おもしろいパーティね」

背後から突然声がかかった。

全員が振り向くと

「死者を縛る者よ、我が敵を縛れ！　レベエリー！」

短い詠唱とともに私たちの足元に円陣が現れる。

「しまった！」

ヴィクトリアが叫ぶ。

だが時遅しである。

アンデッドに効果を発揮する拘束魔法が発動し、シンカイとヴィクトリアは動けなくなってしまうた。

動けるのは私だけだ。

「残念、一匹残ったわね」

私たちを襲った相手は面倒くさそうにいうと、こちらに近づいてくる。

「貴女、しゃべれるのね。なら私たちも同じ仲間だわ」

「同じ？ 仲間？ このワタシが？」

彼女は端整な顔立ちを醜く歪めながらクスクスと笑い、こういった。

「バツカじゃないの、仲間ですって、ワタシはずっと一人よ、死ぬ前もこれからも、それでいいの！ アンタ状況が理解できてないでしょ？ いいわ、もっとわかりやすく教えてあげる」

ワクーム！ と彼女が唱えると風の刃が私たちを襲う。

「クッ」

動けない二人をかばった私を容赦なく切り裂く。

致命傷こそなかったけど、体中から血が流れる。

「バカウルド！ 早く逃げるか、反撃するかしなさいよ、このままじゃやられるだけよ」

「だめ！ やっと見つけた4人目だもの、絶対仲間にする！」

「この状況でまだ元気なようね、次は容赦しないわ」

詠唱をはじめ“ダーク・プリースト”

それが彼女のモンスター名だ。

相手は本気らしいが知ったことじゃない、私も引かない。

こんな場所でひとりなんて、孤独がいいなんて絶対うそだ。

「アンタね、少しは人の、はなし、を……」

ヴィクトリアが何か言いかけて止まった。

「どうしたの？」気になってみると、色違いの眼は床に散らばった袋の中身を見ていた。

そして、その中の一点に集中している。

「あれって、ウルドが見つけたの？」興奮気味の声は少し震えているように聞こえた。

「うん、さっきの宝箱のなかに…」

「アンタって最高！あれこそアタシが“イセキ”から持ち帰った魔法無効化アイテムよ！」

動けないヴィクトリアにかわって拾い上げると彼女に見えるようにかかえる。

それは薄い板だった。本でもなく、武器とも思えない。盾にしては小さすぎる感がある。

「どうすればいいの？」

そのまま、アタシの指のところで持つてて、というヴィクトリアの言うとおりにするとわずかに動く指で板を数回たたく。

「あら、最後の悪あがきかしら、わずかに動く指だけでなにをするつもりかしらないけど、この円陣はやぶれないわよ」

勝ち誇ったようにいう彼女を無視して、私とヴィクトリアは作業に集中した。

とはいっても私はただ板を持つてるだけだけど。

「できた！」

ヴィクトリアが心底うれしそうに叫ぶ。

「フン、死になさい、マ・ブラド！」

私に向かって闇が迫ってくる。

その黒い霧が私を覆えば、体中の血液を腐らせ殺すだろう。

だが私は信じている。ヴィクトリアは優しく囁いてくれたのだ、もう大丈夫だと。

「なにこれは？」

“ダーク・プリースト”の困惑した声が聞こえる。

私も見たことのない光景だった。

円陣が一瞬で消える。それだけでなく、眼前に迫っていた死の霧も消滅していた。

ヴィクトリアが起こしたのだ。

「フフ、これが古代魔法の一端よ。時間がなくてこれしか持ち帰れなかったんだけど」

板でトントンと肩をたたきながらヴィクトリアはいう。

「なんで、動ける？ 半日は効果が続く束縛魔法無効化円陣よ、それがどうして…」

「答えは簡単、これのおかげ」

そういつて板を指差す。

「さて、散々やってくれたわね、覚悟はいいかしら」

「反撃開始、だな」

シンカイが構える。

「それで勝ったつもり？ ワタシは“ダーク・プリースト”、アンデッドのアンタたちを消滅させる魔法をもってるのよ」

「それは使えないわ、だって貴女もアンデッドだもの」

今度こそ彼女の双眸が大きく見開かれる。

「お前、見たな？」

地の底から聞こえそうな低い声で彼女はいう。

そう、私には見えたのだ。先の真空魔法を放つ瞬間、彼女の半顔を隠すようにたらしめていた前髪の下から白い骨が覗くのを。

「そう、これがワタシよ」

おもむろに彼女はローブをはだける。

そこには…

伽藍とした体、ウジがわき、内臓はあるべきところがない。

動いているのはモンスターならではだろう。

「探索者ばかり襲ってた罰かしらね？ 気がついたらこんな姿だったわ」

「アンタのいう通り、ワタシは自分も浄化されるあの魔法は使えない」

煮るなり、焼くなりすればいい、とその場に座り込んでしまった。

「まったく勝手なやつだな」

「そんなことしないわ、ただ仲間になってほしいの」

私がつと、ヴィクトリアが間髪要れず

「アタシは反対よ」といった。

どうやら簡単にはいかなそうね。

私は心でつぶやく、やれやれ、と。

階層その7

「絶対反対！大事なことだから2回いうわ」

引かないヴィクトリアと、頑なに拒む女プリースト。

「最下層を目指す我々としては、禱り屋の力が必要なんだが」

シンカイがどちらともなくいう。

まずは自己紹介を、私はウルド、貴女は？と尋ねる。

「ワタシの名は、アシユレイ」

「私たちにはアシユレイの力が必要な、仲間になってももらえない？」

「フン、あっちの吸血鬼は反対みたいだけど」

「あれは嘘、本当は仲間にしたいの。でも素直じゃないから」

アシユレイはため息をつくと、

「ワタシはね、探索者すべてが憎いの。だから生きているころは“探索者狩り”だった。迷宮なんて無法地帯なんだから、健全に探索やってなにが楽しいの？ 他の連中が手に入れたレアアイテムを奪った方がよっぽど賢いわ」

探索者を狙う賊はどこにでも存在していた。初心者振りをしてパーティーに混ざり襲うヤツ、通路にトラップをしかけ探索者を待つヤツ、負傷者を偽り賊仲間の下へ誘い込むヤツなど手口は様々で、私も何度か襲われたことがあった。幸い仲間に助けられ、事なきを得たが。

相手も探索者である以上、ある意味モンスターよりも厄介な存在である。

「わかったでしょ？ ワタシは危険なヤツよ。そっちの吸血鬼が正しいわ、ワタシを仲間にしたって背中への心配が増えるだけよ」

クスクスと、アシユレイは笑う。

「いいよ、気に入らないならいつでも襲えばいいよ。それで仲間になってくれるなら私は構わない！」

なっ、アンタ正気？

ちよっ、ウルド本気なの？

アシュレイとヴィクトリアが同時にいう。

「うん、正気だし、本気よ。それぐらい私はアシュレイを仲間にした
たい」

「ここまでまっすぐに誘ってるんだ、二人ともいいかげん素直に…」
シンカイが助け舟をだそうとした、

そのとき、

ドゥーン！

通路を揺るがすほどの地響きが鳴る。

全員が音の方向を見る。

ㄟ字形の角から現れたのは、

「シグ・マ！」

表情が読めないシンカイから驚愕が伝わってくる。

「知ってるの？」

私の問いかけに、シンカイは答える。

「ああ、前に遭遇したときは、49階の“守護者”だった」

その容姿は両腕が鎌のように鋭利な刃と化し、顔は骸骨、胴体からは6本の脚が生えていた。

“シグ・マ”の振り上げた凶刃が私たち目掛けて襲ってくる。

迷っている暇はない、

「いくぞ！」

シンカイの短い号令で、私は飛び出そうと構える。

そのとき、アシュレイへ“シグ・マ”の凶刃が迫る。

「アシュレイ！」

私は彼女を突き飛ばす。

おかげでよけ損ねてしまった。

右腕から、ジンツと痛みが来る。

それはすぐに激痛へと変わった。

私の右腕は切り飛ばされ、鈍い音を響かせ壁にぶつかる。

「ガアー」

通路内を絶叫が木霊する。

痛みを声で逃がすかのように、私は叫んだ。

右肘から先はなく、血が噴出している。

「まったく、ワタシなんかを庇うからひどい目に合うんだ」

といいながら、アシュレイは詠唱を始める。

すでに出血で朦朧とした私には何を唱えているかわからなかった。

「キュアデイル」

優しい声でアシュレイは私に回復魔法をかけてくれた。

「腕が生えた…」

彼女が私の右肘に触れた瞬間、そこから先が再構成されたのだ。

「ありがとう」

アシュレイに礼をいうと、プイッとそっぽを向かれてしまった。

「フン、これ以上戦力を減らすわけじゃないでしょ」

「さあ、いくわよ」

そして、彼女は禱り屋としての本領を發揮してくれた。

ガードアップの守護魔法、魔法無効化への解除魔法、武器強化の

付加魔法と立て続けに唱える。

「いい？ 効果は3分よ！ それで決着をつけなさい！」

「ありがたい」とシンカイ。

「頼んでないわよ」とヴィクトリア。

2人はそれぞれの役割へ集中する。

そして私も、やることは決まった。

“シグ・マ”を倒す。

狙いは胴体と脚の接続部、まずは相手の動きを止めるため懐へ入り込む。

一気に四本の矢を打ち込み、さらに三本撃つ。

狙い通り“シグ・マ”の巨体がグラつく。

追い撃つようにシンカイが私とは反対側の脚へ切り込んだ。

見事、片足を切り落とした。

完全に機動力をなくした“シグ・マ”へヴィクトリアの核撃が二連発で炸裂する。

(残り2分16秒)

さらに私はヤツの背中へ向けて、天井からありったけの矢を打ち込んだ。

こういうときは的がデカイに限る。

おもしろいように“シグ・マ”の背中に矢が突き刺さる。

刺さる。

刺さる。

刺さる。

(…1分24秒)

最後の抵抗か“シグ・マ”のむき出しのブツ太い骨の尾が私へ唸りを上げて迫る。

激しく吹き飛ばされ壁に激突する、一瞬呼吸ができなくなったがガード魔法のおかげで体制を立て直す。

(クツ…あと、32秒)

まだ息はある。

5発目の核撃が“シグ・マ”を襲った。

あと、9秒

自棄になったのか骨の尾が壁や通路を容赦なくたたく。

おかげでなかなか近づけない。

…3秒

だめか、と思った瞬間、タイミングよく飛び込んだシンカイの刀が“シグ・マ”の頭へ突き刺さる。

ゼロ。

“シグ・マ”の双眸から光が消えた。

倒した、の？

恐る恐る死骸へと近づく。

「終わったよ」

シンカイが刀を引き抜きながら答えてくれた。

ふー、安堵の息が漏れる。

なんとか倒せた、その主戦力はアシュレイだった。

彼女の魔法がなければ倒せたかどうか。

視線をアシュレイに向け、ジッと見つめる。

「なによ、まだ仲間になれっていうわけ？」

またそっぽをむかれる。

「うっん、もう誘わない。だってさっきいっしょに戦ってくれたで

しょ？ もう立派な仲間だよね」

「！」

あきれたようなアシュレイの顔を無視して私はいう。

「じゃあ、張り切っていきましょ、目指せ40階！」

アシュレイを強引に仲間に加えた。

二人からの抗議を背にしながら、私は先へ進む。

歩きながら私は思う。

“シグ・マ”を倒し、アシュレイが加わったことで確信を持った。

このメンバーならば必ず最下層へいける、と。

階層その8

「それにしても拍子抜けね」

アシユレイが気の抜けた声でつぶやく。

きっと、ここ40階へ下りるとき通過した“守護者”の間を指しているのだろう。

“シグ・マ”との戦闘後、私たちは準備万端で“守護者”のいる部屋へと向かった。

しかし、そこで私たちが目にしたのは“守護者”ではなく、開きっぱなしの扉であり、“守護者”の姿はどこにもなかったのだ。

シンカイの見解では

「おそらく、“シグ・マ”がこの“守護者”だったのだろう。だが、どういうわけか扉が開き外にでてしまった。で、通路を徘徊しているところで俺たちと会敵した」

ということらしい。

たしかにあの凶暴なモンスターが“守護者”といわれれば納得もいく。

あんなのが何体も通路をウロウロしている姿など想像したくもない。

そして、私たちは難なく“守護者”の間を後にしたのだった。

「それにしても解せないのは扉の封印が解かれていたことだ。あの扉は内側からは決して開けられないよう封印されている、ヴィクト

リアがでれなかったのもそのためだ。“守護者”がいない“守護者”の間など意味ないからな。だがそれが破られた。今のところ考えられることは二つ、一つは我々とは別の探索者がいて扉だけを開き、放置した。もうひとつの可能性は、何者かによって封印が解除された」

というシンカイの推測に、ヴィクトリアがおずおすと答える。

「ごめん、多分アタシが犯人」

私を含め全員が足を止めて、ヴィクトリアを見る。

「しかし、いったいどうやって？」シンカイがたずねると

「これ、使ったの覚えてる？」そういうとヴィクトリアは例の板を取り出した。

「アシユレイの緊縛魔法を破壊したやつね、そういえばそれって何？」

ちよつと前に私が見つけた宝箱の中に入っていたものだ。それを使って魔法の使えない状態にもかかわらずヴィクトリアは見事に魔方陣を破壊してのけたのだ。

「うん、これって魔法力の根源に干渉できる装置なのね。魔法システムの詳しい説明は省くけど、簡単にいうと力の源に干渉できるから、普段使ってる魔法に対して絶対的な行使力を持てるの。だから魔法が使えない状態でも、それが魔法によって作られた無効状態なら、その魔力の根源を絶つてしまえば魔法の効果を無くすことができたりするわけ」

私には難しくてよくわからない説明だったが、二人はしきりにうなずいている。

「そうか！あのととき無効化を無くすために使った効果が“守護者”の間の封印まで破壊してしまった、ということだな」

いつも冷静なシンカイがめずらしく興奮している。

「でもまあ、元々の原因は誰かさんが余計な攻撃をしかけてきた結果だから、不可抗力ということだ」

「フン、アンタがそんな奇妙なモン使うからでしょ」

ヴィクトリアとアシュレイは相変わらず険悪だった。

現在地下40階、シンカイが言うにはここから仕掛け通路となっているらしい。

仕掛け通路とは、正しい順序で通路を通らなければならず、順序を間違えると39階に上がる階段まで戻され、はじめからやり直しとなる。道順をしっかりと叩き込まなければ、永久に先へ進めないということだ。

「ここは右、次は左と」

小まめにマッピングをしながら、探索を進める。

「待って！」

私の耳がモンスターの気配を捉える。

敵はおそらく5体。

「じゃ、いこうか」

シンカイが静かに刀を抜く。

「ええ」

各々がうなずき、戦闘態勢に入る。

(ほんとに頼もしい仲間たちね)

私は敵陣へ飛び込むシンカイを横目に、弓を構えた。

階層その9（改訂）

「やっとここまで来たわね」

ヴィクトリアが感慨深げに言う。

私も同じ気分だった。

私たちは地下48階にいた。

目の前の階段を下りれば、最下層まであと一階だ。

「感傷に浸るのは50階についてからにしてくれよ、それに油断するな、この下は最後の“守護者”のいる階だ。下りる前に準備しすぎて困ることはないぞ」

一階からの探索行を振り返っていた私は、シンカイの言葉で現実へと戻される。

（そのとおりだ、まだゴールじゃない）

改めて気合を入れなおす。

そして、

「じゃあ、いきましよう」

私たちは地下49階に向かって階段を下り始めた。

ここまで仲間はいなかった。

この四人で最終決戦を向かえるのだろうか。

でも大丈夫、と私は思う。

私たちは最強よ。

自分に言い聞かせるように私は心で何度も繰り返した。

49階に下りるとそこは一本道となっていた。
しばらく進むと、扉が現れた。

その先は“守護者”の間だ。

なにがでてくるのか、想像はつかない。

でも、いくしかない！

「みんな、いい？」

私は誰に確認するでもなく、聞いていた。

「ああ、いこう」

シンカイが答える。

それを合図に私は、扉に、力を加える。

ズズズツと重い扉は開かれてゆく。

そして、私たちを迎えたのは、

赤い光だった。

それはたくさんあった。

高い位置、低い位置、その間と広間を埋め尽くさんばかりの赤光。

それはすべてモンスターの目の光であった。

数はおよそ200。

つまり100体のモンスターが私たちの相手だ。

100対4

「やるしかないよね？」

その後戻りはできない。

「もちろんだ」

頼もしい骸骨サムライは潔く答えてくれる。

「しかたないわね、最後までつきあってあげるわ」

めんどくさそうなアシユレイの声もいつも通りだ。

「核撃撃ち放題ね、みんな巻き込まれないように気をつけて」

「グイクトリアの危険な言動も今は心強い。」

「うん、みんな、いくよ！」

私は思いつきり地面をけり敵陣へと飛び込んだ。

矢を撃ちまくる。

壁から、

天井から、

また壁から

天井から

私は縦横無尽に駆けながら弓を引く。

正直狙いの精度は落ちるが一体でも多く当たるよう撃って撃って撃ちまくる。

モンスターが100体もいると区別がむずかしい。

一番目立ったのはやはり“シグ・マ”であった。

単体の時のように集中攻撃ができず、なかなか仕留めることができない。

(やっぱり数が多すぎる！)

焦燥が疲労を生み、私は壁から落ちてしまった。

クッ

なんとか着地したものの、すぐに囲まれてしまった。

ダークデイモン・フラツカー・ビッグマウス、あとはわからない。
少なくともピンチにかわりない。

(どうする…)

考えようとした瞬間、フラツカーのデスサイズとビッグマウスが私を襲う。

(だめ、避けられない、なら、玉砕覚悟で)

「突っ込むだけだわ」

叫ぶと同時にフラツカー目掛けて突っ込む。

デスサイズが私の胴体を切り裂く…ことはなかった。

私は目の前の光景を疑った。

なんと、ダークデイモンがフラツカーを殴り飛ばすと、そのままビッグマウスに激突し2体ともに戦闘不能にしてしまったのだ。

「よう、大丈夫か？」

ダークデイモンがしゃべった。

あの悪魔が探索者だったのだ。

形勢は一気に逆転した。

ダークデイモン(味方)、まだ名前を聞いていないので。

彼は次々にモンスターを殴り蹴り、潰していく。

最後はあの“シグ・マ”と取っ組み合いを演じ、見事に倒してしまっただ。

100体のモンスターを撃破した私たちは皆一様につかれきっていた。

事情を知らない三人は、私がダークデモンと並んで立っている光景は、さぞかし異様に写ったに違いない。

シンカイは切る気満々で構えていた。

「みんな待って！」

私が静止し、説明をする。

ようやく、三人は緊張を解いた。

私たちは無事モンスターの大量という“守護者”をクリアしたのだ。

最後の最後にダークデモンという仲間を得ることができた。

彼がいなかったらと考えると、ぞつとする。

いずれにせよ、今は休ませてほしい。

次はいよいよ最下層、その前に少しくらい休んでも罰はあたらな
いよね。

階層その10

最下層、地下50階は異質な空間だった。

シンカイやヴィクトリアの言った通り、床はツルツルしていた。49階から降りてきた階段と直結しているから迷うことはなく、薄暗い空間が広がっていることだけはわかった。

「ここが、最下層……」

私は確認するようにつぶやいた。

そう、私たちはとうとう50階まで降りてきたのだ。

「ヴァンは来たことあるのか？」

ヴァンと呼ばれた“ダーク・デモン”は答える。

「いや、俺も来たのは初めてだ」

「俺が来た時は、この先にヤツがいた。ヤツは“深王”と名乗り、俺たちに挑んできた」

生きていたところの記憶を語るシンカイ。

「どんなヤツなの、その“シンオウ”ってのは？」

私の質問に答えようと、シンカイが口を開く。

「ヤツは『ようこそ！探索者諸君！』」

シンカイの声は別の声によって消されてしまった。

その瞬間、周囲が明るくなる。

それはまるで地上の昼間のようであった。

(まぶしい)

ずっと松明と魔法の頼りない明かりだけだったので、この強烈な閃光に全員が目を開けていられなかった。

しばらくして、目が慣れはじめ周囲を確認すると、暗いときはわからなかったが、けっこう広い部屋だった。

特に変わったものは目に付かなかった。
壁は漆黒でブーンと“キラール・モスキート”のような低い羽音が鳴っている。

「みんな、大丈夫？」

私の呼びかけに皆一様に大丈夫だ答えてくれた。

『さて、私は君たちの目の前にいる』

言われたとおり前を見ると、豪華で大きな椅子に腰掛けている口
ーブ姿を確認することができた。

顔はフードによって見えない。

「あなたが、“シンオウ”？」

『いかにも、我こそがこの迷宮の主“深王”である』

「なんでアタシたちはモンスターの姿で生き返ったの？」

間髪いれず、ヴィクトリアがたずねる。

『ふふ、見ていたぞ。39階で私のシステムに介入したのは貴様だ
つたな。まさかあのような端末がまだ残っていようとは、驚いたぞ
だが、と“シンオウ”は続ける。

『それは所詮外部端末に過ぎん、ここにあるメインシステムへの介
入は不可能だぞ』

さつきから必死にヴィクトリアはタンマツと呼ばれた板を操作し
ていた。

「だめ、いくらやってもこここの魔法無効化を解除できない」
彼女の焦燥が伝わってくる。

つまりこのままでは二人の魔法援護なしでヤツと戦わねばならな
いということだ。

『話がそれた、お前たちがなぜモンスターの姿なのか、という質問

だったな？ それは私に人体の再構成をするプログラムがないからだ。だから構成可能なモノで用意するしかなかった』

「でも、私たちの記憶は？ 死んだのに覚えてるなんてどう考えてもおかしいよ」

『記憶の保存はデータ変換後、可逆圧縮によって可能だ。探索者のサンプルデータは大量に保存してあるからな。体を用意しデータをダウンロードしてやればいい』

データ？カギヤク、アツシユク？ロード？

(なんのことかさっぱりよ)

私はまったくついていけなかった。

しかし、ヴィクトリアは違った。

「サンプルって、私たちの記憶をどうやって手に入れたわけ？ 死体でも保存するっていうの？」

『そんな面倒なことはしない、サンプル回収は上級モンスターにプログラムをしてある。低レベルのサンプルなど必要ないので、高レベルの探索者でなければ遭遇しない“ダーク・デイモン”などがその役割をになっている。後は死体の頭部より脳を持ち帰らせ、サンプルデータとして保存していた』

全員が固唾を呑む。

脳を持ち帰る？

死体はいくらでも見てきたが、人体を解体したいなんて一度だっ
て思ったことはない。

ダーク・デイモンが私の頭部から脳を掬いだす光景を想像して、
吐き気がこみ上げてくる。

「…なら、私たち全員が集められたサンプルってわけね」
さすがにヴィクトリアの声も暗い。

『当たり前だ、そのためにサンプルを保存しておいたのだからな。私の役目はこの迷宮の維持だ。今から262年前から探索者が減り始め、255年前に誰一人下りてくる者はいなくなった。その原因を探るため私は外に観察用のモンスターを送り、迷宮の入り口を塞ぐ巨大な岩を確認した。私はすぐに岩の破壊を命じ、壊した』

「それで、人はきたの？」

『いや、入り口は開いたが訪れる者はいない。さらに観察の範囲を広げ近隣の町を見て、私は死体の山を発見した。戦争だったのかもしれないし、病の類かもしれない。迷宮に入れるような探索者どころか人そのものがいなかったのだ。そこで私は考えた。どうすれば迷宮としての機能を維持できるだろうか、と探索者の来ない迷宮など存在する意味がないからな。やがて私はひとつの結論に達する』

「それって、まさか…」

頭の悪い私でもそれぐらいは想像がつく。なんて最低で最悪な回答だろう。

私の心情など無視して“シンオウ”は続ける。

『それは、私自身の手で探索者をつくることだった』

階層その11

“シンオウ”の回答を聞いた瞬間、私は反射的に弓を構えていた。

『慌てるな、狼娘よ。魔法の使えぬお前を黽つても興ざめだ。今からボス戦に相応しい舞台へ招待しよう!』

ヤツがそう言い終えると、足元が光始めた。

青白い光が私たちを包む。

(これは、テレポート?!)

視界が歪み、暗転する。

…最初に感じたのは柔らかい風だった。
ゆっくりと視界と平衡感覚が戻ってくる。

「ここは、地上…」

見上げると青空が広がっていた。

『喜んでもらえたかな?』

(…芝居くさい台詞だ)

『では、死んでもらおう』

「くるぞー」

シンカイの声に一同が構える。
炎撃だった。

(あいつ、詠唱なしで撃ってる！)

詠唱なしの魔法など見たことがなかった。

“シンオウ”は次々と炎撃を放ってくる。

恐ろしい速さで連射される炎撃に、私たちは防戦一方だ。

「これでは近づけん」

めずらしく焦りを見せるシンカイに、

「今から隙を作るわ」

ヴィクトリアがいうと、“シンオウ”の炎撃に対して氷撃をぶつけて相殺した。

『小癪な真似をする…、ではこれなら、どうだ？』
空間が緊張する。

(この感覚、核撃だ！)

「そっくり返すわ、“リフレクシヨン”」

私たちを包囲していた、“シンオウ”の魔法は一転、“シンオウ”自身へと牙をむく。

「今だ！」

ヴァンの掛け声とともに、私とシンカイもヤツへ攻撃を加える。

まず、ヴァンがその豪腕でヤツを力まかせに殴った。

首が千切れんばかりの勢いで殴り飛ばされる。

間髪いれず私がヤツの体へ矢を射った。

「！」

キンツと金属音を響かせ矢は刺さらず、弾かれてしまった。

シンカイの刀も耳を劈く金属音を響かせヤツの腕で防がれている。
『私の体は特別でな、お前たちの攻撃など効かんぞ』

「シンカイ、どうするの？」

「ヤツの体にも弱点はあるはずだ、そこを突く」

シンカイの冷静な物言いが私を安心させてくれる。

なんとかかなりそうに思えてくるから不思議だ。

「弱点つて？」

ヴァンが聞く。

「狙いを一箇所に集中させる、狙いは…」

『休んでる暇はないぞ！』

私たちを炎撃が襲う。

「散れ！」

シンカイの号令で私たちは弾けるように散開する。

「みんな！ 援護するわ！」

アシユレイの加護魔法がかかる。

“インヴィクター” 3分間の無敵状態。

ヴァンが一気に突っ込む。

ヤツの懐に巨体が潜り込み、そこから垂直に突き出される拳が顎を力チ上げる。

鈍い打撃音を響かせ、ヤツは宙を舞う。

そして、私はヤツの首に狙いを集中し、矢を放つ。

(ありつたけの矢をぶち込でやる)

『小賢しい、探索者どもめ、消えろ！』

さすがはラスボス、空中から核撃を放つ。

だが、
爆撃から白い塊が飛び出す。
ヤツと同じ高さまで跳躍し、
シンカイの刀が、振り下ろされる。

(まだ、切れてない)

シンカイは刀を首に当てたまま、地面に叩きつけ、
ヤツの首を切断した。

倒した！ と思った瞬間、

グラツと視界が歪む。

(また、転送！)

…転送された場所は、最下層であった。

(戻された)

私はがっかりして、肩を落とす。

(ヤツは倒した、でもこのままじゃ、ここからでられない)

『よくぞ、私を倒したな。探索者諸君』

「なっ、なんで声が！」

私は首のない死体を確認する。指一本動いた気配はない。死体の横たわる床には血？　なのか、わからないが黒い液体が広がっていた。

『なにを驚いている？　“私”は何度だつてお前たち探索者の前に立ちはだかる者。それがこの迷宮の管理者たる“私”の役目。そして、お前たちの役目はこれで終わりだ』

「私たちの、役目？」

『そう、お前たちは“私”を倒し、見事迷宮をクリアした。次は別のサンプルデータを使って一からやり直す』

「ふざけるな、また私たちみたいに探索者を作るなんて絶対ゆるさない！」

ヴィクトリアが怒気をあらわにして叫ぶ。

『なにを勘違いしている？　ここまで来たのは、お前たちが初めてではないぞ。すでに何組もここに来ては“私”に消されてきた。最初の頃は苦労したぞ、なんせ体がモンスターというだけで発狂してしまい、まともに地下1階すらクリアできなかつたからな』

『いろいろな実験を繰り返した、一度に10体を用意したり、48階から始めさせたり、だが最下層に到達できる者はいなかった。そこで“私”はガイド役を用意することにした。それは成功し、最下層までくる探索者も出始めた。“私”はこのシステムに満足している。本来であれば“私”を倒した時点で地上へと強制転送するところだが、今はここが終着点だ』

『さあ、終わりにしよう』

そして、

ゆっくりと、

白い影が、

私たちの前に、

立った。

『紹介しよう、我が影にして、探索者のガイド役。 “シンカイ深灰” だ』

私は耳を疑った。

(今なんていったの？ ワガ、カゲ？ ガイド？)

目の前に立つ白骨の侍は、私たちを静かに見つめている。

階層その12

最後の最後の敵は、シンカイであった。

私たちに向かつて構える。

私はシンカイと出会ったときのことを思い出していた。

「え〜と、は、はじめまして」

「……………」

それをきっかけに一気に思い出が頭を駆け巡る。

結局、

私は、シンカイと一緒に地上にでたいのだ！

それが、純粋な願いだ。

だから、叫ばずにはいられない。

「シンカイ！ 私は、あんと一緒に地上にでたいの！」

『無駄だ、コイツは戦闘狂、戦いなしでは生きていけない輩よ』

「それなら、地上で戦えばいい、もし地上に満足できなかったら、私が相手になってやる！」

叫んだとき、シンカイが

「…上だ！ ウルド、天井にヤツの本体がある！」

そして、弓を構え、私は天井に向かって矢を射る。

『貴様！ 裏切つたな！』

矢は弾かれ乾いた音をたてて床に散らばる。

『まあいい、所詮弓矢ごときで強化ガラスを割ることはできまい』

「そつでもない」

シンカイの勝ち誇った声が聞こえる。

そつ、私たちの勝ちだ。

私は弓が壊れるほどの力で引き絞る。

矢の代わりに、番えたのは、シンカイの刀。

最初の攻撃は陽動、そのときシンカイは刀を鏢からはずし、私に向かつて滑らせてくれたのだ。

『やめろうううううう！』

聞くもんか！

私は、放った。

刀は見事に天井に突き刺さった。

『な、ぜ、ダ、わ、タ、し、ハ…』

天井からドォンツツという轟音が鳴る。

「アシュレイ！」

後ろではすでに魔方陣が展開している。
魔法もつかえるようだ。

いける！

“シンオウ”戦で地上に転送されたとき、アシュレイに座標をマークしておいてもらったのだ。

あとは、

「いこう、シンカイ」

私は骨ばった彼の手を掴んだ。

「いや、私は残る。それがお前たちを騙し続けたせめてもの罪ほろ

…」

最後までは言わせなかった。

私がキスをして口を塞いだ。

すでに部屋には警報音や『ウォーアニング、ウォーアニング』と訳のわからない言葉が鳴り響き、危険だということはわかる。

だが、このままシンカイ一人おいてはいかない。
なぜなら、

彼も、私たちの大切な仲間の一人だから。

「いこう、シンカイ」

私はもう一度いうと、

手を引き、みんなの下へと駆け込んだ。

“テレポート”

アシュレイの魔法が発動し、私たちは転送される。

そして、視界は暗転した。

エピソード

「さて、これからどうする？」
ヴァンがたずねて来る。

地上に無事でられた私たち5人はこれからについて話していた。

「うん、まずは拠点を作る。それから付近の探索、そして…」

私はヴィクトリアの方を向いていう、

「北を指そうと思うの」

「北のシエルターね」

「うん、そこに何があるってわけじゃないけど、当面の目的地として設定したいとおもつ。あとは目指しながら、成り行きにまかせようかと」

「決まりだな」

「しょうがないわね、こうなったら最後までつきやっけてあげるわ」

今度の探索は地上だ。

私たちの探索は終わらない。

「さあ、みんな、いくわよ！」

FIN

階層その12（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。
短い話でしたが、少しでも楽しんでいただけたならば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9142s/>

凶気の迷宮

2011年6月25日09時10分発行